日本古典全書

俳諧七部集 下

監修　新村出　高木市之助　久松潜一
山岸徳平　小島吉雄

俳諧七部集

下

萩原蘿月校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

萩原蘿月（はぎはらげつ）
明治十七年東京生。昭和三十六年歿。明治四十三年東京大學國文學科卒業。明治學院、慶應大學、二松學舍大學教授等を歴任。主著―芭蕉の全貌、俳諧文學論、感動律俳句の理論と作品等。

日本古典全書
「俳諧七部集」下　萩原蘿月校註
昭和二十七年七月三十日初版發行
昭和四十二年二月二十日第六版發行
印刷所　明善印刷株式會社
發行所　朝日新聞社（東京都千代田區有樂町・大阪市北區中之島・北九州市小倉區砂津・名古屋市中區榮）
定價　四四〇圓

目次

本文

ひさご……三
猿蓑……二五
晋其角序……二五
巻之一……二七
冬……二七
巻之二……二九
夏……二九
巻之三……三三
秋……三三
巻之四……四四

春……六四
卷之五……八一
卷之六……九七
幻住庵ノ記……九七
几右日記……一〇四
跋……一〇九

炭俵……一一一

序……一一一
上卷……一二四
春之部發句……一三七
夏之部發句……一四八
下卷……一五八
秋之部……一五八
冬之部……一六七
俳諧秋之部……一七五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

續猿蓑……一九三
卷之上……一九三
今宵賦……二〇九
卷之下……二二六
春之部……二二六
夏之部……二三五
秋之部……二四七
冬之部……二六四
釋教之部—追善・哀傷……二七九
旅之部……二八三
跋……二八七

俳諧七部集

下

萩原蘿月

(一)莊子、逍遙遊中の、魏王のひさごの故事によつたものか。

(二)逍遙遊に、「惠子謂二莊子一曰、魏王貽二我大瓠之種一。我樹レ之成而實二五石一。以盛二水漿一、其堅不レ能二自舉一也。剖レ之以爲レ瓢、則瓠落無レ所レ容。非レ不二樗然大一也。吾爲其無用一而捨レ之。莊子曰、夫子固拙二於用一矣。……何不レ慮以爲二大樽一而浮二于江湖一。云々」とある。

(三)蒙求に、「費長房者汝南人也。曾爲レ椽。市中有二老翁一。賣レ藥。懸二一壺於肆頭一、及二市罷一、輒跳入二壺中一。市人莫二之見一。唯長房於二樓上一、覩レ之異焉。因往再拜奉二酒脯一。翁知二長房之意其神一也、謂レ之曰、子明日可二更來一。長房且日復詣レ翁。翁乃與俱入二壺中一。唯見レ玉殿嚴麗旨酒甘肴盈二衍其中一。共飲畢而出。翁約不レ聽二與レ人言一之」とある。

ひさご　膳所

江南の珍碩我にひさごを送れり。これはこれ水醬を盛り酒をたしなむ器にもあらず。或は大樽に造りて江湖を渡れといへるふくべにも異なり。われまた後の惠子にして、用ゐることを知らず。つら〳〵そのほとりに眠り、あやまりてこのうちに陷る。醒めて見るに、日月陽秋きららかにして、雪のあけぼの闇の郭公もかけたることなく、なほわが知人ども見え來たりて、皆風雅の藻思をいへり。知らず、

これはいづれのところにして、乾坤[四]の外なることを。出でてそのことを云ひて、毎日この内にをどり入る。

元祿三　六月　越智越人

（四）唐の元稹の幽棲詩に、「壺中天地乾坤外。夢裏身名旦暮間」とある。

(一)山家集上、春に「木のもとに旅寢をすれば吉野山花のふすまを着する春風」とある。これの一轉だらう。土芳の三册子に、木のもとは云々とあつて、「花見の句のかゝりを少し得て、輕みをしたり」とある。

(二)前句の旅人を、任地へ赴く地方官の下人と見て、その者のさしなれない墓肌の太刀が似合はないといふ意。ひきはだ(鞘)とは墓(ひきがへる)の背のやうに皺のある革作りの尻鞘。

(三)遷都へ參内する公家のさまであらう。司召とは、京在勤の六位以上の人に榮爵を賜ふこと。式は八月十一日だから、月待たでと云つた。

(四)急な遷都で、附近の柚人が籾臼を懸命に作ること。位が昇れば俸祿も殖えるから、多く作る必要がある。

(五)前句柚人の家のそばに、鞍を置いた三歳駒が、荷物を運ぶ支度をしてゐる。

(六)急に雨が降つて來たので、馬の支度をする百姓が、はやてだ、そばえだなどと云つて騷ぎ合ふさまであらう。逃句だらうといふ説もあるが、どうか。

(七)諏訪の溫泉(ゆ)につかつてゐる人々

ひさご

花見

一 木のもとに汁も鱠も櫻かな　翁

西日のどかによき天氣なり　珍碩

旅人の虱かきゆく春暮れて　曲水

二 佩きも習はぬ太刀のひきはだ　翁

三 月待たで假の內裏の司召　碩

四 籾臼つくる柚が早わざ　水

ウ 五 鞍置ける三歳駒に秋の來て　翁

六 名はさま〳〵に降りかはる雨　碩

七 入り込みに諏訪の湧湯の夕間暮　水

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

の話。錦江の通旨に「諏訪の温泉は、信州下諏訪の驛中に三所あり。旅人及び驛中の人みな平生入浴す。本陣の際にあるは、中を隔てゝ高貴、或は男女をわかつ。往來の雜人は上に覆ひなし」とある。

（八）前句、入浴の山伏がひとりよがりをいふこと。

（九）狹い自分の胸の中で物をきめてしまつて、くよ〳〵してゐる女の戀。

（一〇）前の戀病ひする内氣な女に、母親などが元氣を出して物を食へと勵ます體。

（一一）平家沒落のやうな場面か。女房たちが荒海の船を恐れて泣くさま。

（一二）故郷を離れて遠く船出した人達が、海上の荒れを恐れて、雁の行く白子・若松あたりを見やるさま。白子は伊勢奄藝郡、若松は同じ三重郡にある海邊の小驛。

（一三）花の咲く頃、お經を受けに一身田の專修寺へ集まる人々が、白子・若松の方へ雁の別れ行く姿をなつかしく見送ること。專修寺は淨土宗高田派の本山、後土御門天皇の勅願所、白子から津へ赴く間にある。千部讀經は子年の上十日、丑年の中十日、寅年の下十日の中に行はれ、三部經を一部づつ僧百人で轉讀するとい

中にもせいの高き山伏　翁
いふことをたゞ一方へ落しけり　碩
細き筋より戀つのりつゝ　水
物思ふ身に物食へとせつかれて　翁
月見る顔の袖重き露　碩
秋風の船をこはがる波の音　水
雁行くかたや白子若松　翁
千部讀む花の盛りの一身田　碩
順禮死ぬる道の陽炎　水
何よりも蝶のうつゝぞあはれなる　翁

ふ。

(一四)千部讀經の法會に赴かうとする順禮が、途中で死んだ。陽炎はそのあはれな亡きがらのほとりにもえてゐる。

(一五)順禮のむくろの上をはかない蝶の飛び廻つてゐることが、何よりもあはれを催すといふこと。

(一六)手紙を書く力さへ失せた戀病ひの女が、なよ〳〵と飛ぶ草の上の蝶を見てはかながるさま。

(一七)前句の女を羅衣を着て日をいとはれる病弱の姫君と見た。

(一八)高貴な美しい子供のむつかるさま。

(一九)前句の稚き人の熊野入りを、關守が固くとゞめること。紀の關は紀伊と和泉の境、雄山の關といふ。

(二〇)日暮れになつたので、雙六をやめて、假に作つた佛壇に向つて、念佛を唱へる老人。

(二一)前句の念佛を唱へる人の無頓着なさま。家普請の間か。

(二二)前句の人を變り者と見て、世間の人が馬鹿にすること。

(二三)頼まれもしないのに踊の世話をやく

一六 文書くほどの力さへなき　碩

一七 羅(うすもの)に日をいとはるゝ御かたち　水

一八 熊野見たきと泣き給ひけり　翁

一九 手束(たづか)弓紀(ゆみ)の關守が頑(かたくな)に　碩

酒ではげたるあたまなるらん　水

雙六(すごろく)の目をのぞくまで暮れかゝり　翁

二〇 假の持佛に向ふ念佛　碩

二一 なか〳〵に土間に坐れば蚤もなし　水

二二 我が名は里のなぶりものなり　翁

二三 憎まれていらぬ踊の肝を煎る　碩

男を、村の人がいやがつてわる口をいふこと。
(二四)踊の世話に、毎晩夜明かししてまでかけ歩いてゐるので、人からいやがられる男。
(二五)荒野の枯薄。
(二六)寂しい野中の一軒家。
(二七)四方露深き草にかこまれた草庵に住む人のもとへ、一貫文の錢を借りに來られたので、斷つてかへすといふこと。續草庵集に、頓阿が、兼好から「よねたまへ、ぜにもほし」といふ語を讀み込んだ歌を送られたので、頓阿は「よねはなし、ぜにすこし」といふ詞を入れた歌を送つたといふ故事の俤。
(二八)頑固な病みほけた老人の心境。醫者の藥もいらない、人からの見舞金も返してしまふ。
(二九)これも頑固な親仁かたぎ。醫者の藥を飲むよりも、吉野あたりをかけ廻つて、花を見て歩く方が、病氣は直つてしまふといふこと。
(三〇)吉野の花見に行つて、山中で虻にさされた。

二四　月夜〳〵に明け渡る月　水
二五　二ノウ花薄あまり招けばうら枯れて　翁
二六　たゞ四方なる草庵の露　碩
二七　一貫の錢むづかしと返しけり　水
二八　醫者の藥は飲まぬ分別　翁
二九　花咲けば芳野あたりを驅け廻り　水
三〇　虻にさゝるゝ春の山中　碩

翁十二　珍碩十二　曲水十二

(一)春の草はその名がいろ〳〵あつて、いち〳〵見分けるのに骨が折れる。原作「いろ〳〵の名もまぎらはし春の草」

(二)その草にとまる蝶も、人から打たれてはじめて眼がさめて、自分はなんといふ草にとまつてゐたかを知る。原作「打たれて蝶の目をさましぬる」

(三)蝶は夢中になつて飛んでゐるのに、蝙蝠は暗い軒下にぶら下つて、のんきさうな顔を出して眠つてゐる。

(四)駕籠の通らない險阻な峠を越えて行くと、大木のうろか岩穴かに、蝙蝠がのんきさうに顔を出してゐた。

(五)峠を下りて里に入ると、夕暮時分で、百姓がかますに紫蘇の實を入れてゐた。かますは穀物を入れる莚の袋。月こぼす。

(六)秋色美しい月の庭を面白く思つて、通行の宮樣が車の内から覗かれると、内には百姓親子が睦まじく月に並んで物を食つてゐた。

(七)庭の秋景色が面白くなつた。引き籠つてゐた宮樣が、御簾の間から覗かれると、向うの部屋に女の子が、侍女を相手にくすぐり合つて笑ひ興じてゐた。その子供の面影が亡き人によく似てゐるので

ひさご

珍碩

一 いろ〳〵の名もむづかしや春の草

二 打たれて蝶の夢はさめぬる　翁

三 蝙蝠ののどかにつらをさし出して　路通

四 駕籠の通らぬ峠越えたり　同

五 紫蘇の實をかますに入るゝ夕間暮　碩

六 秋の色宮ものぞかせ給ひけり　同

七 こそぐられては笑ふ俤　通

八 移り香の羽織を首にひきまきて　同

九 小六唄ひし市のかへるさ　碩

思ひ出して悲しくなつた。
（八）廓の後朝の別れか。女のうつり香の殘る羽織を首に卷いて、くすぐられて笑つたあの時の女の顏を樂しく思ひ出しながら歸るさまであらう。
（九）いろ女の移り香のする羽織を首に卷きつけて、小六ぶしを唄ひながら、市場から歸る道樂者のさま。小六とは慶長頃江戸赤坂に住んだ馬方の名で、その聲が美しいので、唄の節の名となり、後世大いに流行し、吉原通ひの馬子唄となつた。
（一〇）前の男がはえ釣りのそばを通る。はえはハヤで、四五寸位の細長い背の青黑い淡水魚。
（一一）百姓親仁が念佛を唱へて道端のお宮を拜んで行くこと。そこから鮠釣りが遠く見える。
（一二）こしらへた藥も賣れないので、この年の瀨をどう越さうかと歎く正直一遍の藥賣りの神だのみ。
（一三）その藥賣りが、しほ〳〵と庄野の町へ入ると、犬に吠えつかれた。庄野は伊勢の龜山から二里東北の驛。
（一四）嫗を連れた稚い子が、庄野の里で犬に吠えつかれて難儀するさま。落人か。

一〇鮠（はえ）釣の小さく見ゆる川の端　通
一一念佛申して拜む三日月　同
一二こしらへし藥も賣れず年の暮　碩
一三庄野の里の犬におどされ　同
一四旅姿稚（をさな）き人の嫗（うば）連れて　通
一五花はあかいよ月は朧夜　同
一六汐のさす緣の下まで和日（にぎび）なり　碩
一七生き鯛あがる浦の春かな　同
二ノオこの村の廣きに醫者のなかりけり　荷兮
一八算（そろ）盤（ばん）置けば物識りといふ　越人

(一五)前句の嫗が、幼兒を慰める詞。底本「月は朧夜」は「朧よ」の書き誤りか。花一句くり上げる。月花兼帶。
(一六)花は赤く、月は朧に霞んで、緣の下まで汐がゆるやかにさし込む長閑な春の漁村。
(一七)しかも生き〳〵した鯛が澤山取れる。曲齋の註に、安藝の宮島の廻廊とし、嚴島神社に千枚の鯛をあげる恒例があるとするが、必ずしも宮島に限るまい。
(一八)邊鄙な村の純朴な風俗。算盤が彈けると物識だと云つて尊ばれる。
(一九)算盤がうまいので土地の人から尊ばれ、この世の中をどうやら退屈もしないで無事に過ごして來た。
(二〇)前句の人を泣上戸と見たものか。酒のさめ際になると、自分の境遇を感謝してまた泣き出す。
(二一)愛兒の死の悲しみを酒にまぎらす人のさまか。變化を伸ばす附句である。
(二二)家の内でまゆを煮てゐるので、門口を通る旅人が珍しがるさま。
(二三)立ちどまつて蠶飼ひのことをたづねる人が、知らないことには智者も愚になる、たとへば五種の智惠を現す文殊菩薩

一九 かはらざる世を退屈もせずに過ぐ　分
二〇 また泣き出す酒のさめぎは　人
二一 眺めやる秋の夕ぞだゝびろき　分
蕎麥眞つ白に山の胴中　人
うどん打つ里のはづれの月の影　分
すもゝ持つ子のみな裸むし　人
二二 めづらしや繭煮るなりと立ちどまり　分
二三 文殊の智惠も槃特が愚痴　人
二四 なれ加減又とは出來じひしほ味噌　分
何ともせぬに落つる釣棚　人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo